



## 街の片隅の幼児教育にも夢はあ

—— 若い保母さんに ——

(都會の保母の思ひ出の記の一節として)

鈴木とく

三月は、保母にとつて、夢の一休止であり、又、新しい夢を描くための、忙殺の時でもあると、私は、毎年、そう思うのです。

數々の夢を抱いて、いつくしみ育てた幼児たちの、門出を祝いながら、小學校入學の、喜びに溢れている幼児たちに、未來への期待はかけながらも、必ずその通りになるといふことの望めない、果敢ない美しさを、幾年か経験した事でしょう。

そして又、新しい幼児たちと、新しい年度を迎えるためにこの、かなしい美しさの中で、次の夢を見る喜びを、そこはかとなく感じた事も幾度のことでしょう。

陽のかけに、春を感じながらも、なお、冷い風の去りやらぬ三月は、私にとつて、あの、恐しい、なれば天災とも思はれる、三月九日夜から十日朝にかけての、「火と風の街」の年以來、悲しい思ひ出の月ともなつてしまつたのです。焔の

中に、母を呼びながら昇天していつたであらう幼児たちのことを思うと、たとえ、育んだ月日は、三年の短いものであつたにせよ、何とも云えない、身を切られる様な切なさを感じるのである。その切なさから、子供たちとの生活の思ひ出を、淺春の陽かけに、あくこともなく、たぐる時、空の彼方のこども達との、さよやかともなるのです。

こども達との生活の思ひ出を語るのは、保母としての私のことども達への懺悔であり、冥福を祈る、さよやかな、捧げものでもあるのです。

スラム街の片隅に、世間から忘れられていた幼児たちとの十餘年の生活を、ふりかえつてみては、語りたくなるのも、兒童福祉法が出来て、こうしたこども達はもとより、日本のすべてのこども達へのしあわせのために、前途に明るい道が開け、教育法が新しくなつて、幼児も、堂々と、教育の對象として重要視されるようになつたいま、幼児たちのために、新

鮮な、バラ色の朝の空に感じる様な「夢」を抱かなければ、と願う氣持からです。

☆

おそらくは、こんな所があるなどとは、思つてみたこともなく、行つて見ようなどと、考えてみたこともないであらうと思はれる、この、東京のイーストサイドにある保育所に來て、働いてみよう、決心されたこと、洪水の跡の、汚い館内の清掃を、黙々として幾日か續けられたことを、あなたの生い立ちからおもつて、卒直に云えば、十年の間に、いや短い人生に、いくたりとも得られない、よき働き相手を得た喜びを、深く感じました。私も、あなた位な年に、この江東の街を來た時は、ほんとに偶然の様なもので、こんな街や、こどもたちのことを、考えてみたり、歩いてみたいと思つたりしたこともなかつたのです。こゝを來てみて、若い私のヒューマニズムが、何かをしなれば、と感じたことから、生活の大部分を、保育の仕事に傾け始めたのでした。

二十代の夢も、三十代の夢も、懐しく残る街を歩きながらそこで見た、私の夢や、感情の流れや、思想の動きをお話しても、十年餘の年の隔りは、あなたのために、通うものがあるかどうか、わかりませんし、思想や、感情の流れに起る喰違いを、感じ取ることすら、私には、難しい様に思えます。十代、或は、それ以上も年上の人の、考え方や、生活感情の流れは、理解し得ても、十年餘も隔る若さの生活感情を、ぢかに感じ取り、理解することの難しさを、しみじみと思つと

き、時代感覚が鈍くなる、と云うことが、どんなことかを、身にしてみても、感じられます。私の語る、過去の人としての保育の夢を、新しい感覚でとらえて、批判してほしいと思ひます。

ともすれば、頑に、古くなつて行きそうな私に、幼いこども達のため、新しく夢を見るヒントを與えてほしいと、虫のいゝ希いを持ちながら、斷片的に、お話ししてみまじよう。

☆

「どんなに理想の社會を想い、憧れ、願つても、この國の大部分である勤勞者（知識的勤勞者は、まあ一應除いて）が、文化的に高まらなければ、自分達の生活環境を、より高めようとする意欲は起らない。幼い時の育てられ方、環境の如何が、成長した後の心に、根を淺して、そこから、より高さを望む芽が、伸びて行くのではないかしら。精神的にも、物質的にも、恵まれた家庭環境を持つ幼児を、より以上に、教育の力で良くして行くことも大切だけれども、街の隅に、放り出されてかまわれぬ、勤勞者の家庭の幼児こそ、それ以上に、教育されなければならないのではないかしら」と、思ひ續けたことが、託兒所——保育所——保育園と、名稱こそ違え、その内容は、經濟的不如意から來る、父母の勤勞から、その大切な成長の時代を、あまり省られない幼児の保護と教育をしている所、そこから、私を、ぬけられないものにしたとも云えます。

「身のほどを知らぬ、たかど、東京の街の小さな一角のこと

も達を、そうした所で、どうなることか」と思えば、實に果敢ない仕事でもあり、その仕事への夢でもありましよう。私が、保母になつた頃は、一九三四年以降の不況時代でしたが戦争の間も、この思いには、變りなかつたのです。——たとえ、大東亞の主になつたとしても、アジアの諸國に出て行く未來の勤勞者が、元氣で丈夫な、そして優しさを漲らした、文化的に高さを持つた者でなければ、日本は、世界の喰い者になる——、と思ひました。そして、みじめに敗れて武器を捨て、新しく文化國家として生れかわろうとする今、尙さらに、衝に忘れられがちな幼児の教育にこそ、思いを致し、未來の文化國家を計畫しなければ、と思うのです。

或時は、失望の谷底に身をひそめて、自分の生い立ちや、性格から来る、どうにもならないものの疑問に悩んだり、不勉強の行詰りからくる果然自失の愚さを嘆いたり、その中にふとなにか明さのさし込むのを覺えて、希望の山をめざして再び歩き出したり等、波の多い歩き方をして、ともかく、年を古くして來たのは、私の心の底に流れる、ヒューマニズムと、ニヒリステイツクなものが、そうさせた様に思はれます。

☆

この街は、今でこそ、家もまばらに、また雑草と、焼跡のがらくたに埋る空地もあります、私が保母になりたての頃は、密集家屋と、煤煙の街でした。その街のこども達に、先生、と呼ばれるようになった時、私は、何時迄も、このこと

も達の、「先生」でなく、「いゝお友達」でありたい、と思いました。そして、願つたことは、このこども達が、大人になつてから、勤勞者であることに、本當のプライドを持ち、人から指圖されたり、おだてられたりして動いたり、言いたい事も、云えずにいる半面、弱い者を、暴力でいぢめたりするようなことがなく、言いたいことを自由に主張し、自分の考えと意志とで動く、自主的な、しかも協同社會で、他に迷惑をかけることを、恥しい、と思うような人に、なつてもらいたいものだ、と云うことでした。

託兒所だから、たゞ怪我をしないように、お守をしていればよい。

託兒所だもの、幼稚園のように、やれ遊戯だ、やれお繪描きだ、折紙だど、お坊ちゃん、お嬢ちゃんとする猿まねの様なことはさせなくともいゝ。汚い鼻たらし小僧に、何をやらせたつて何の甲斐があるものか。

貧乏人のこども達は、これ以上、どうにもなるものじゃない。母親達だつて、何をありがたがることか。

等々の、大人達や、同じ仕事を、しかも長くしている人たちから聞く、これらの言葉に、何ともいえない憤りと、反ばつて感じたのです。私は、今も、若いその憤りや、反ばつて

懐しく思います。そのことが、子ども達への愛着と入れまじつて、何とかやつてみよう、勉強してみよう、という氣持にさせてくれたからです。

——自主的であらせたい。協同的であらせたい。弱い者、年下の者に優しいたわりと、親切の持主であらせたい。そして、伸びくとした自由な氣持を持たせたい。

文學もわかり、音楽も愛し、劇も好む等、そうしたものも養ひたい。——

粗末な着物、身なりも餘りかまわれない、腕白共を相手に次から次と、こんな望みが湧いて来るのですが、さて現實は出來ないことだらけでした。それなのに尙、まだ何かこの上夢を見つゞけたい等と思うのは、ほんとお人よしの、理想主義者かもしれませんね。

——幼児の生活の場が、何故、小學校的な匂いがしなければならぬのかしら。觀察、お話、唱歌、遊戯、手技等、何故、あんなに難しいものや、長い時間、我慢してやらなければならぬものなどを、年令別にかたまつてしまつて教えられなければならぬのかしら。何故、あんなに、何もかも、手傳つてあげなければならぬのかしら——。

幼稚園の保育を、聞いたり、見たりし、又他の保育所を參觀して、たゞ單に幼稚園のまねをすることに力を入れている様子を見たりして、こんな風に感じたのです。

——家庭で生活したり、街頭で遊んでいる子ども達は、何時も／＼あんなに、はつきり年令別にはなつていない、年上

の兄弟に、いぢめられたり、助けられたり、年下の友達を、からかつてみたり、親切に面倒みてやつたりして、生活しており、その中で、色々と感じたり、感じたりしているのではないかしら。一日の長い時間を生活させなければならぬ保育所で、何から何まで、幼稚園のように、年令別割據主義でする必要もなさそうに思う——。と考へたのは、社會生活の協同性と協力を養ひ、年下の者、弱い者を勞る氣持を培うのに、どうしたらいいのかしらと思つた時です。そして、他の人からの助言もあつて、保母のみんなと話し合ひの上、年令別の組の分け方を、居住地域別の、年令混合に編成しなほして、保育をしました。

思えば、兒童心理もよく勉強せず、幼児の發達過程についても、何の研究もしていない者の無謀さ、だつたかもしれませんが。

この保育は、年長兒の、知的なものを、おし進める時と、年少兒の、基礎的な生活習慣の自立を訓練することに、不都合と、取扱ひの技術的な難しさを感じて、そうしたものの場合、年令別に集つてするように、變つて行つたのですが、生活的には、とても和かで面白かつたし、今、思い出してもほ／＼と楽しくなる、子ども同志の、たすけ合ひ、いたはり合ひの情景や、地域的な母親同志の親密度の深まり等がみられて、よい面もあつた、と思はれるのです。このことは、十四五年も前に、初めて、試みたことでしたが、その後、淺草、深川、再び本所と、街の片隅のスクラムにある保育所へ移つた

度に、保母同志が、自分の組にたてこもり、その組への愛着と責任感の強さの餘り、保育所で生活する、全幼児のつながりに關心が薄いのを感じました。これは、保母同志が、感情的對立をしているのでなくとも、教育的に、全體の相互關係ということを餘り深く考えていなかつたからだと思います。

そのために、年長児が、遊具に對して、獨占的だつたり、專制的だつたり、ボスのリーダーに、ペコ／＼したり、年少児に對して、暴力的だつたりするのが、目立つて感じられたのです。その度に、一日の生活の或所に、年令混合的な生活をさしはさむように試みて、それを和らげることが出来たのを思いますが、この事を、全面的に否定し切れないものを感じるので。

この、幼児のクラス編成或は、グループ構成について、協同社會を、より良くすることに、快く協力する人として生長するために、幼児の心身發達過程からと、教育的見地から、勉強を進めて、新しい保育の夢を抱いてほしいとねがうのです。

☆

地域的なグループを作つた頃の保育所で感じた、助力的な興える色の濃い幼児文化材を使う保育に、何か、わり切れないうワクを感じ、それをする前に、何かあるように、思えて仕方がなかつたこと、漠然とではありましたが、自分のことは、自分でする習慣、幼児にやれる、日常生活の様々な事、主として勤勞的なことは、それ自身が、幼児の教育となるの

ではないかしらとかんがえ、生活の技術を身につける様な保育のしかたに、重點をおいてきたのでしたが、十五、六年たつた今、漸く、それが、間違つた事ではなかつたと、わかつて來ました。

保育所にある、ピアノもオルガンも、人形芝居の人形も、紙芝居も繪本も、ラヂオも蓄音機も、みんなこども達自身のものとして使えるようにするために、それ等のもので、一日の生活を、楽しく、友達と協力して過すためには、こども達の間から生れ、又は、保母の助言で導き出される、規律や習慣が、いつとはなしに身につけていなければ駄目でしょう。私と三年保育を共にしたこどもたちは、(中にはあしかけ二年位の時もありましたが)自由に、楽しく、よそでは、先生だけが使う物を使って、遊んだのです。

一生の中に、ピアノ等弾いて樂しめる、身分になれるかどうか、わからないこの環境のこども達をおもうと、ホールの隅に、どつしりと据えられたピアノは、何故、先生だけのものにしておかなければならぬのかしら、と思つたからです。他の物についても同じ考え方なのです。

☆

各組の机や椅子を、何時も部屋らしく、揃えておけない環境にあつたこども達は、重い机は二人づゝで、椅子は各自で一日に、二度は、運んで並べたり、しまつたりするのを保母と一緒にしました。帚でホールを掃除したり、雑巾がけを手傳つたり、便所の戸を綺麗に拭いてくれたり、色々な仕事

を喜んでしてくれました。今なら、何でもない事でしょうがその頃は、「あんな小さな児に、パンツをはくのも手傳つてやらない。掃除までさせて、可哀想に」と云う聲の多かつた時代だつたのです。

お八つの後の話合いに、机片づけに對して「僕はいやだよ」と、はつきり云う保君に、「なぜ？」と、きくと、「何時も何時も、僕と、とし手ちやんだけ、おしまいまでするんだもの」と、理由を云うと「みんなで代る番にすればいいわ」と、提案を出すとし手ちやん。

グループの名前も、皆で云いあつて、好きなものをつけるし喧嘩があれば、見ていた皆で、話合つたり、言いあいをしてやりして、保母と一緒に、納得のいく仲なおりをする様にしむけて行きました。

朝、給食當番の保母と一緒に、市場に買物に行つて、野菜を揃いだり、お八つの風呂敷包を持つたりするのが、どんなに楽しいことだつたのか、男の兒たちも、馬鈴薯を洗つたり玉葱の皮をむいたり、それを、お勝手迄運んだりするのが、どんなに愉快なことだつたのか、私は、かつての、この子ども達の、ビチ／＼した楽しそうな生活を思うと、今、此處の子ども達に、もつと彼等に適した設備をしてやつて、時には、お八つのハツツケーク位、みんなに焼いてあげて嬉しがる顔を見たいなあ、夢を見るのです。

保育所での長い時間を、或所は、狭い意味の教育的扱いに或所は、家庭的に、しかし、全體として、ホームライクなも

のを濃くして、のんびり、自由に、しかも放任でなくやりた  
いものだなあ、と思うのです。

☆

戦争のために、直接に、間接に不幸な思いに、打のめされ  
た母を持つ幼児たちのために、楽しい生活の設計を想いませ  
んか。

ホールの正面に、暖爐を築いて、冬は、パチ／＼燃える薪  
をみながら、童話でも聞かせたい。ピアノの脇に、ソファと  
客用のテーブル、椅子等をおいて、子供たちの遊ぶ姿を見な  
がら、お客様と話をしたい。お茶を出したり、お菓子をすゝ  
めたりすることもさせたい等、とおもいませんか。

—— 出来ない相談だ。文化的に、生活的に低い親を持つこ  
ども達に、そんなことをした所で、希望や、期待など持てる  
ものですか——と、あきらめたり、悲觀したりする前に、ほ  
ら、あの子ども達の、はちきれる微笑を、私は夢にしたいの  
です。

今日は、グループについてや、私の保育の考え方など、と  
りとめもたく語りましたが、又いつか、この街を散歩しなが  
らでも、他のことについて色々と思ひ出話を聞いて頂きまし  
よう。そして私の語る保育さんが、あなたの保育に、若い  
人へのみゆるされた、素晴らしい、豊かな、美しい夢を描く、何  
かのよすがともなれば、とねがうのです。

忘れられた、街の片隅の幼児教育にも、見れば見果てぬ夢  
がかくれているのを感じとつて下さい。